

書評

***Religion in the New Millennium: Theology in  
the Spirit of Paul Tillich***  
eds. Raymond F. Bulman & Frederick J. Parrella  
Mercer University Press, 2001

與 賀 田 光 嗣

は じ め に

本稿では、2001年 Mercer University Press から刊行された論文集 *Religion in the New Millennium: Theology in the Spirit of Paul Tillich* (eds. Raymond F. Bulman & Frederic J. Parrella) より、一つの論文を取り上げる。本論文集に対する詳細及び他の論文に関する書評は、鬼頭葉子「書評 *Religion in the New Millennium: Theology in the Spirit of Paul Tillich*, eds. Raymond F. Bulman & Frederic J. Parrella, Mercer University Press, 2001」、『ティリッヒ研究』(現代キリスト教思想研究会)第6号、2003年3月、63-71頁所を参照。

**Paul H. Carr, "Science and Religion: Original Unity and the Courage To Create"  
(pp.313-317)**

1

本稿では、2001年 Mercer University Press から刊行された論文集 *Religion in the New Millennium: Theology in the Spirit of Paul Tillich* (eds. Raymond F. Bulman & Frederic J. Parrella) より、一つの論文を取り上げる。

この論文の筆者カーは、現在米国空軍研究所の名誉教授であるが、この論文を執筆した当時は、マサチューセッツ・ローウェル大学で "Science and Religion: Cosmos to Consciousness" という哲学の講義を受け持っていた。そして、この論文の主題は「科学と宗教」である。一般的に「科学と宗教」は単なる対立項として扱われることが多い。ところが筆者は副題にあるよ

うに両者を「根源的統合」という観点から扱おうとしている。この観点のキーワードが「創造への勇気」であるとされる。またその具体例として、ガリレオ裁判が取り上げられている。

さて、本論文のキーワードである「創造への勇気 (Courage to Create)」とは、ティリッヒの教え子でもあり心理学者でもあったロロ・メイ (Rollo May) の著書の題である。メイが定義する創造性とは「何か新しいものを我々の存在において表現するだけでなく、存在へもたらす」であり、「勇気とは絶望の欠如ではなく、絶望にも関わらず前進する能力」である。筆者によると「創造への勇気」の源は、ティリッヒの『生きる勇気 (Courage to be)』において表現された「神を越える神 (God above God)」(Tillich[1952a],p.186)であったとされる。何故なら「創造への勇気」とはそれを持つ主体の「生きる勇気(存在への勇気)」によって基礎付けられており、その「生きる勇気」とは、筆者によるティリッヒ引用によると「生きる勇気」とは、神が懐疑の不安のなかで消滅してしまったときにこそあらわれ出る神に基礎づけられているのである」(ibid.)とされるからである。この「神を越える神」に触れた人間は「創造への勇気」を持つことによって、「創造的な自己」を失うことから免れることができる。

このようにして宗教は「創造への勇気」、すなわち創造性の必須な源泉の一つなのであり、また「芸術、文学、科学における人間の創造性は文化の源泉」なのである。これに対して、「科学は宇宙を理解するための形式的方法」、つまり創造性の具体化の一つの形態と考えることができる。筆者は、以上を、「科学とは文化の一部であり、宗教の形式である。そして宗教とは、科学と文化の内実である」とまとめているが、これは、「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」というティリッヒの文化の神学の基本命題に従ったものと言えよう。科学と宗教は、人間精神の異なる次元 創造性の具体化の形式と創造性の源 であり、相互に依存し合っているのである。筆者は「創造への勇気」という点に着目することにより、「科学と宗教」の「根源的統合」が再び図れると結論付ける。

筆者は以上の「科学と宗教」の「根源的統合」という観点からガリレオ裁判の意味を解釈する。ガリレオが支持するコペルニクスの太陽中心説を、当時のカトリックが否定したことについて、筆者の解釈を整理するならば、二つの論点があったこととなる。

一つめの論点は、科学的な証拠に関わるものである。ガリレオの地動説支持には何の科学的証拠もないと主張したとき、その教会の判断は科学的に正しかった。筆者は、ティコ・ブラーエが年周視差を発見できなかったために、地動説を受け入れなかったということをその一例に挙げる。ガリレオの地動説支持の証拠である潮の満ち引き ガリレオは潮の満ち引きの原因を、地球が地軸を中心として行う日周運動と太陽の周りの年周運動とが合わさることに見ていた の科学的な裏づけはニュートンの登場(重力の発見)を待つこととなる。

二つめの論点は、カトリックを中心とした、当時の世界の間人像と倫理というものの、新

しい科学によって否定されるという点である。これは当時の人々を不安へと導くことに繋がるため、ガリレオが支持する説は否定されることとなった、と筆者は述べる。また、ダーウィンが進化論を提唱した際にも同じようなことが起こったと筆者は付け加える。

筆者によると「ティリッヒ自身は、「創造的な自己」という在り方を奪う」という我々の技術社会が持つ非人格化の力に強く反対している」(Tillich[1959],p.121)。しかしまた、「創造と混沌とは相互依存的であって、聖書の宗教の排他的唯一神論さえも、生のこの構造を確証している」(Tillich[1963],p.51)という一文が引用される。これは、技術社会 = 悪、前技術社会 = 善、という単純な見方に対して、技術社会と前技術社会とを、「創造的な弁証法的緊張」において保持すべきだというティリッヒの考え方に基いている。

ガリレオ裁判は他律的な(heteronomous)教会に対する人間の自律(human autonomy)の挑戦であった、と筆者は述べる。しかし忘れてはならないのは、ガリレオがトマス・アクィナスやボナベントゥラの考え 聖なる書物は創造(創造された自然)という書物と聖書という書物の二巻から成立している に賛同している点である、と筆者は指摘する。そのためガリレオの立場はそれ自体宗教的であって、彼は「創造への勇気(Courage to Create)」を持って、教会の絶対的な(absolute) 筆者はティリッヒより「すなわち、神的なもの與人間的なものとの間に無限の距離を置くプロテスタント原理は、かの新しき存在についての、いかなる教義的表現に対しても、絶対性(absolute)を与える根拠をなくする」(Tillich[1963],p.177)と引用し、ガリレオがプロテスタント原理を持っていたと指摘する 宇宙論の主張に挑戦することができたのである。よって、ガリレオにおいては「科学と宗教」の対立など存在せず、むしろ「根源的統合」があった、と結論付けられるのである。

## 2

次に、以上のカーの議論に対して、書評者としての論評を加えることにしよう。

現在、筆者が指摘するような技術社会の弊害(非人格化)によって、科学自体が問題視されている。勿論これは一面的な批判であるが、この批判に対する反論も同じように一面的である(技術楽観主義)。評者は、筆者が述べるように「創造的な弁証法的緊張」の必要性を感じる。翻って、宗教批判は、一般的に筆者がガリレオ裁判で見たような、宗教組織・制度の持つ他律性に向けられている。だがこの一般的な宗教批判は、ガリレオにおいて何故宗教的根源から人間の自律性が成立してきたのか(宗教改革との関わり 西欧近代の成立)という問いに答えられない。また、宗教の実定的次元(制度・組織)と、自律的な創造性の源としての宗教性という次元を混同しているように思える。

このような次元の混同は、現代において「科学と宗教」を単なる対立項として扱うという風潮に見て取ることができる。先に見た筆者の論点は、「科学と宗教」を考える上で、重要な論点

だと思われる。

ここで評者が問題としたいのは、筆者によるガリレオ裁判の取り扱い方の妥当性である。

そもそも筆者にとってのガリレオ裁判とはどのようなものであったのか。ここで取り上げられた論文のみでは、紙数の関係もあり、その全体像が捉えにくい。この論文から捉えられるのは、「科学と宗教」の「根源的統合」がガリレオにあったこと、当時のカトリック教会には「根源的統合」がなく他律的であり、人間の「創造的な自己」を奪っていたということ、である。

では問題のガリレオ裁判とは何であったのか、その補足説明をしたい。

そもそも当時の科学というものは、19世紀以降の近代的意味における科学とは異なっていた。中世のスコラ学には、神が書かれた「二つの書物（「聖書」と神が創造した「自然」）」という考え方があり、ガリレオの立場もこの延長上にあった。その意味で、科学者と見なされる人々には「科学と宗教」の「根源的統合」があり、これは言い換えるならば、彼らは神学者として（自然神学）その仮説を発表していたのである。たとえば、コペルニクスの『天球の回転について』は1616年において一度閲覧禁止になったとはいえ、それ以前も以後も禁書になったことはない、という事実がある。

また我々は、ガリレオ裁判が行われた時代状況を把握しなければならない。ガリレオの生涯は16世紀半ばから17世紀半ばであり（1564-1642）、所謂ガリレオ裁判は1616年に第一回目の裁判があり、1633年に第二回目の裁判があった。宗教改革の始まりが1517年のルターによる九十五か条の公開質問状によるとされ、対抗宗教改革の始まりがトリエント公会議（1543-1563）によるとされるため、ガリレオの生きた時代はカトリックとプロテスタントの対立という状況にあったといえる。それを端的に表しているのがガリレオの二回の裁判とほぼ同時期に行われた三十年戦争（1618-1648）である。

宗教改革において様々な論点があったといえるが、その重点とされるのは聖書解釈である。「信仰のみ」「万人祭司説」「聖書のみ」というプロテスタントに対し、カトリックは「伝承」を重んじる。三十年戦争に見られる緊迫した状況下において、ガリレオの神学は（「自然」を「聖書」に優先させる可能性 多義的な聖書解釈を許す可能性 教義の問題へ）認められるものではなかったのである。

紙数の関係上詳述することはできないが、最近の研究によれば、ガリレオ裁判の背景には、当時のカトリック内の政治的動向が絡んでいたことが指摘されている（たとえば、ガリレオを庇護していたトスカーナ大公国と教皇庁の対立など）。

このような背景を踏まえると、以下のことが明らかになる。カーのこの論文では、ガリレオの宗教的信念（自律性）と、教会の他律性という対立構造における「創造的な自己」という点が論点とされている。つまりこれは、ガリレオという「個人のレベル」における「科学と宗

教」の「根源的統合」が語られている、ということである。しかしながら「科学と宗教」の問題は次の三つのレベルにおいて見ることができる。一つ目は先述した「個人のレベル」。二つ目は実定的次元（制度・組織）としてのカトリック対プロテスタントや、諸国家の対立などに見られる「集団のレベル」。そして三つ目は、「個人のレベル」や「集団のレベル」と深く関わる「理論と教義のレベル」である。ガリレオ裁判に即していえば、宇宙論と教義（聖書解釈へ）がこれに該当する。そのため、ガリレオ裁判の取り扱い方として妥当なのは、「科学と宗教」の「根源的統合」を「個人のレベル」ではなく、むしろ「理論と教義のレベル」において見ることだと思われる。

この問題に関する議論は、「科学と宗教」の「根源的統合」の着地点を模索する上で欠かせない議論となるに違いない。その時こそ、筆者が期待するように「科学と宗教」の「根源的統合」が再び図れるのではないだろうか。

（よかた・こうし 日本聖公会神戸教区神学生）

